



上磯町章

# 香の磯

発行日 ● 平成14年11月16日

発行 ● 東京上磯会

編集責任者 ● 東京上磯会事務局

「上磯町民憲章」 わたくしたちは、輝く歴史を受けつぎ、豊かなまちづくりにはげむ上磯町民です。

生産のまち……仕事をほこりをもつてさらに豊かな町にしよう。  
文化を高めるまち……ふるさとに根づく文化の花を咲かせよう。  
福祉のまち……互いにいたわりあって住みよい町にしよう。

環境愛護のまち……恵まれた海や山や川を大切にしよう。  
教育のまち……あすを創る子どものしあわせな町にしよう。

## 「優しさを取り戻そう」

東京上磯会の目指すもの

東京上磯会会長 相馬正樹



憶えば「東京上磯会」が数人の顔ぶれの同期生が集まって、小・中学校や高校の同窓会名簿を頼りに消息を掘り起こし、ようやく設立準備会の開催に漕ぎつけたのが一九九五年でした。

思いもかけず、一六〇人も参加者があって盛大な発会式を喜び合ったのは、昨日の夢のように感じられるのですが、七年もの昔のことになってしまいました。

回を重ねるうちにこのような「ふるさと会」は、懐郷の念に駆られた同郷の友が集い、酒を飲んで旧交を暖めるだけでは空しい、何かもつと魅力あるビジョンがなくてはならないのではないかとと思うようになりました。

それは、先般朝日新聞のコラムで「ふるさとに帰りたいは四五％」という見出しが目についたのがきっかけでした。地方から出て来ている四十才以下の人が出たアンケートで、半数以上が「故郷に帰りたいとは思わない」という結果になったという。我々老人にとっては思いもよらないことで、どうしてそんなことになったのかと考へさせられてしまう。

食べきでないから」と答えたそうです。黒柳さん自身も、涙をこらえて話されていたのを思い出す。この優しい思いやりこそは、人間みんなが持っている共通の心なのです。

平和ボケと併せて富裕ボケした若き世代の心を取り戻すためにはどうすれば良いのでしょうか。もう一度昔の貧困生活に戻すことは出来なくても、諦めて手を組んで見ているだけでは埒があかない。私は、あの貧しさを身をもって体験され、心に優しさが溢れている故郷の皆さんたちと、現代っ子たちとが、故郷を遠く離れた東京の地で交流の場を広げることが、もっとも効果的な優しさと呼び戻す方法ではないかと思えます。

東京上磯会が発足して八年目になります。最初の頃、相馬さんからの会の結成について話があり、どの様なものが出来るのか、まるで見当がつかない中で、幾人かの設立幹事を決めていただき、前後何十回となく意見を交換しながら、ようやく結成に漕ぎつきました。

また、卒業年次でもその差の開きが大きく、同じ小学校卒業者でも十年の差があれば別の社会の人ようになって、ふる里を語るにしてもなかなか噛み合わないことも少なからずあるものです。

更に、年長者では上磯を出て三〇年以上もなっている人も珍しくないのです、そのギャップも大きいです。

私ごとですが、私は戦後の社会不安定だった、昭和二十四年に上磯を出ました。その当時と現在では勿論、町も住人も様変わりしており、たまには帰省をしているが、まるで知らない町に入り込んだような気持ちになることがあります。正しく、今浦島の感を深くします。

## ふる里談義

東京上磯会副会長 小田島二郎

ふる里とはやっぱり、自分が育ったそのまの町を遠くから思い出しているのだから一番よから思えてなりませぬ。だがしかし、私にとっても、この会のお蔭で町内出身のいろいろな方々と交流を得ました。それが大げさに云えばなよりの喜びでもあります。

次に、ふる里意識の変化があります。私たちの頃では、連絡船でテープを切り、ときには水盃を交わして別れを惜しんだものですが、近年では上磯、東京間も日帰りコースとなり、ふる里は遠くにあるものではなく、日常生活圏の一部でもあるようになってきているとすれば、なつかしさも、思い出も変わるといってもありましよう。



私がいま、最も気がかりなことは、年々才々、会員の参加者が減少傾向にあるというところにつきま。このままではジリ貧を待つことになるかと思いません。これまで申し上げた理由もありませんが、加えて、具体的な運用の問題点を検討しなければならぬのは当然であると思っております。

いずれにしても、この際会員の皆様の協力とより斬新な提案を期待しなければと思えます。はてさて、このようにしてこれからの会のあり方を考えておられますと、この老練にみる悩みはつきませぬ。まさしく老練心なのだろうか。

冬のでもないのに雪のよう白い粉が舞い降りる私の故郷は「上磯町字東浜町一七二番地」。

大きな日本セメント工場場の煙突を見ながら育った私は、いつの間にか深く考える事もなくセメント会社に就職し、気が付いたら東京の生活が故郷でそれよりも長くなり、まもなく五十半ばは差し掛かるうとしていた。

セメントといえば砂と水と砂利を混ぜたコンクリートが出来るとは、皆さんよくご存知で、日本の国土建設に欠くことのできない材料であり、青函トンネルは正しくコンクリートの塊といえる。鉄道橋、道路橋、ダムに飛行場、ビル群と至る所にその実力を発揮して向かってくる敷物といつたことあるが、一つだけ絶対に勝てないある食品がある。それはご存知の方が多いはず……。

その食品とは「砂糖」である。10kgのコンクリートに僅か2.5gの砂糖が混入するだけで、全く固まらなくなってしまうのだ。明治14年頃から我が国を守り続けていたコンクリートが甘いものだからつきり弱いとはちよつと微笑ましいとは思いませんが、セメント工場の煙突を思い出し「コンクリートの天敵をご紹介してみたい」。

事務局 黒田

さて、これまで申し述べましたことは大まかですが、基本的な問題であると思えます。これらは問題点を変化や実情にてらして、過去にこだわらず再検討し見直しすることが肝要ではないでしょうか。

これらの会運営は、従来のものから脱却した新しい組織づくりと、もつと踏み込める会運営を計り、魅力あるものに育てていくことが出来るかどうかにあると思えます。総意を結果したいと思えます。

昭和三十八年三月末、故郷上磯から連絡船と夜行寝台で上野駅に降り立ってから、あつこい間に三十数年の月日が流れ、白髪頭を撫でる度に里心が湧いて「おれ、今日この頃」。

「漁しのび 心むや 北寄汁 北洲」

事務局長 黒田

# 東京上磯会報の発行にあたり 一言御挨拶申し上げます

上磯町議会議長 水上 務

東京上磯会の会員の皆様方におきましては、日頃から「ふるさと上磯町の発展」のため、何かとご尽力をいただき厚くお礼申し上げます。私ども、上磯町議会議員二十六名は本年二月に改選を終え、私、水上 務が議長の職に就任いたしました。



現在町議会におきましては、国が進めている「市町村合併推進の問題」の調査研究のため特別委員会を設置し、町の将来に向けての

協議を進めているところでございます。市町村合併については、将来人口は増加の推計を立てており、財政についても、長年海老澤町長が進めて来た町政の推進により、道内でも財政が上位を示しているところであります。

私ども議会といたしましては、町民生活重視の立場を忘れることなく、重要施策を強力に推進し、豊かで活力のある町づくりのために一層努力していかねばならないと思っております。

今年度の北海道は七月、八月は曇天ばかりで、気温も低く太陽を見ることができたのは一週間程度であり、農作物の生育にも影響が出た寒い夏でありました。

反面、東京方面は非常に気温も高く、例年にならぬ猛暑の連続との二ニュースを見ておりました。

どうも皆様方には、お身体に気を付けながら過ごされませうよう折念し、今後ともふるさと上磯に対するご支援を賜りますよう、心からお願いを申し上げます。



## 東京上磯会の 会報発刊に寄せて

上磯町長 海老澤 順三

東京上磯会の会報発刊に当たり心からお喜び申し上げます。今年度は、東京上磯会の皆様方も新聞紙上でご覧になりご存知かと思いますが、上磯中学校女子陸上部の成田可菜絵選手が全国中体連陸上競技大会において、一〇〇M

現代は、余暇の利用として軽い運動やスポーツを上げる方、また職場や家庭内でのストレスの解消としてスポーツを行なう方が多く見られます。

当町は、町民皆スポーツのまちづくりとして、体育館、陸上競技場や野球場、そして町民の方々が待

二〇〇M二連覇、四×一〇〇Mリレーで優勝と中体連史上初の三冠を達成しました。この快挙に町民の方々と感激し、喜んでいらっしゃるでございます。そしてさらに、上磯町の名が全国に知られたり、本町にうれしく思っている次第です。

東京上磯会の皆様方も都会の雑踏の中で生活から、ちよっと抜け出し、これからの秋晴れのもと屋外に出て、スポーツをしてみてはいかがでしょう。心地よい汗を流し、心身ともにリフレッシュし、これから迎える少子高齢化や厳しい経済情勢の中を生き抜くためにも、健康づくりや体力づくりを進めていただきたいと思います。



大盛況の町民スポーツの集い

最後に、東京上磯会のますますのご発展と会員皆様のご健勝をお祈り致しまして、会報発刊にあたってのごあいさつと致します。

### 歴史的価値認められる—上磯・男爵資料館収蔵「日本最古の蒸気自動車」

日本最古の自動車として知られる、町内当別の男爵資料館(木村孝二館長)にある蒸気自動車「ロコモビル スタンダード・スタイル No.2」が、博物館明治村(愛知県犬山市)で開催中の「明治のりもの博覧会」(11月24日まで)に出展されることが決まった。

同車にとっては、2000年の国立科学博物館(東京都台東区)以来、2度目の館外展示で、木村館長は「この車の持つ歴史的な価値を認められ感無量です」と喜んでいる。又、「大勢の人たちにこの車を見てもらうことは大きな喜び」と、展示を心待ちにしている。

この大勢が見て喜ぶ

ロコモビルはイギリスから輸入した苗を基に「男爵」を開発、全国に普及させたことで知られる川田龍吉男爵が(1856~1951)が、1901(明治34)年に購入した国内で最も古い車。川田氏は晩年、町内当別で暮らし、車両は没後、現在は同資料館として使われている建物内から見つかった。発見された当時は傷みが激しく、78年に走れる状態まで復元され、今は同資料館に展示されている。

(H14.10.10) 函館新聞より転用

### わが故郷 七重浜の思い出

(浜分) 小笠寺 直巳

今年の夏も両親が眠る七重浜の墓を訪れた。私の子どもの頃は、はまなすの花と砂浜だけで、人の住む建物がほとんど見当たらない。このあたりは、今ではショッピングモールや飲食店や温水プールを附属したホテルが立ち並び、昔を知る者にはこの変わりようには隔世の感がある。

当時の七重浜は、遠浅の海岸のため小さな子どもにとつても、安全で水のきれいなすばらしい海水浴場であった。朝から泳いだり海水につかったり、寒くなると焚き火で体を暖めたり、甲羅干しをする。腹が減ると、じゃがいもを旧陸軍の鉄兜を改良した鍋に海水を入れて茹で、屋敷代わり食べる。しかも浅瀬、蛤、ほっき貝などを獲っても地元魚師さんは大目にもってくれた。このようにして日が暮れるまで海辺で過ごしたものである。

又、七重浜海岸には防波用か防潮用か知らないが堤防があり、ここではソイやカレイ等の魚がよく釣れた。青函連絡船の入港や出港を眺めながら、見知らぬ土地へ思いを馳せながら釣糸を垂れた。だから、どの子も夏休みの登校日には真っ黒な顔をしていた。喧嘩はしたが、いじめや不登校や校内暴力は皆無であった。

七重浜は、私の人間形成に大きな影響を与えた故郷である。しかし、七重浜は悲しい歴史ももっている。それは、海岸道路の一角に建立されている青函連絡船「洞爺丸」遭難者の慰霊碑がすべてを物語っている。

一九五四年(昭和二十九年)九月二六日、台風十五号が北上し、その強風のため青函連絡船「洞爺丸」が七重浜沖で座礁し転覆した。その結果、死者、行方不明者は一、一五五人にのぼり、辛くも救助された人は一五九人にすぎなかった。日本海難史上、最大の事故であり、一九二一年のタイタニック号遭難に次ぐ大きな海難事故となった。高校二年であった私は、近所のおばさんの強い制止と忠告により浜辺に行くことは出来なかったが、浜分小学校の校区の父兄が海岸に打ち上げられたご遺体の運搬、安置や吹き出しなどに協力したことは言うまでもない。

台風十五号は、客船「洞爺丸」の他貨物船の「第十一青函丸」「北見丸」「千勝丸」「日高丸」の連絡船の遭難をもたらした。又、岩内町では台風で避難した民家から出火し約三、五〇〇戸が焼失し、被災者が一七、五〇〇人ものぼった。水上勉の小説「飢餓海峡」は、この大事故を題材としている。



# ふるさとはどこですか

横浜市在住 小松直樹  
(上磯町東浜出身)

「ふるさとはどこですか。」  
私は「函館」と答える。「函館」と言った後で少し心に引っかかる物を感じながら……。大抵の内地人は「上磯」と言っても知らない事は百も承知である。北海道人でも知らない人が多いだろうと思う。

「函館? よいところですか。」  
ほとんどの人は必ずと言っていい程、そのように返す。その時初めて私は、「函館の隣町で車で20分ほどの“かみいそ”と言うところなんですヨ。」そして続ける。「トラピスト……よく聞かれましたよ……そこが、私のふるさとなんです」。「そのトラピストには女子修道院と男子修道院があり、女子修道院は函館にあり、男子修道院はわが町“かみいそ”にあるのですよ。函館を訪れる観光客は女子修道院には必ず行くでしょうけれど、男子修道院にはほとんど来てくれません。しかし、男子修道院からは津軽海峡、函館湾が一望に眺めることが出来、牛が放牧されていて牧歌的な素晴らしい所なんですヨ」と答える。

聞いている方は、男子修道院と女子修道院の区別はあまり付かずトラピストと言うと湯の川のトラピスト又修道院を連想する様だ。トラピストクッキー、トラピストバターは当別のトラピストで作られていることを話すと、「クッキーもバターも食べたことがある。美味しいですねー。」と言いつつ、あの表のデザイン(のトラピストのイメージ)を思い浮かべてくれる。広大な敷地の高台にトラピストがあり、牛が草をはぐくみ、修道士が黙々と働き、祈りを捧げている様子、沈黙の園の話をする。

皆、「行きたい……」と必ずと言っていいほど言う。ここでわが意を得たりとなる。そして続ける。春の清川陣屋の桜、ホッキ貝、透明なコリンコリンとした活きの良いイカ刺、「いが〜……いが〜……」と早朝の通りを走る甲高い声、そして秋のシャケの湖上、冬の寒さと厳しさ、ストーブのある部屋はシャツ一枚の生活等々オールシーズン、話は尽きない。

ぜひ函館へ、そして上磯のトラピストまで足を延ばして北海道の自然を満喫してほしいとPRする事となる。

まさに北海道のよ味、誇れる一級品の観光資源が、わがふるさと“上磯”にあり、自然豊かな“上磯”を誇りに思う。そして、いつまでも青い海、深い緑の“上磯”を残してもらいたいと思う。



祝賀会は同日午後六時から海岸沿いの洞爺丸遺跡現場近くのホテル海王館函館スバビーチで行なわれました。

この二町以外三万台はございません。ここで私のことを述べます。私の勤務した駒沢大学は僧侶の養成機関のときから数える、文禄元年(一五九二年)から四一〇年の伝統があります。明治一五年一月五日、曹洞宗大学林専門本校となつて、学校制度に則つた教育機関となつて、本年が開校二二〇

## わが母校 浜分小学校

堀口英一

われしました。五時半、会場に到着し、先着の知人、同窓の方々と昼の上で一時間半、楽しく語り合いました。上磯会からは近藤八重さん、実弟の伊藤幸男さん、それに小笠原直巳先生と小生の四人が出席いたしました。

資料により、北海道の広さは内地の広さにすると、東北六県と新潟を合わせた広さでございす。統計データでは全道は三四四一、五四町、二八村より成つております。わが上磯町は町としては、道で二番目の人口で三万五千七六七人、第一位は音更(おとふけ)十勝支庁)が三万九千九百八十八

周年になります。道内からの進出者が大変多くなったので、大学近くには北海道庁をつくらうと言うのが話しの出発点でした。同窓の有力者や五〇〇の道内曹洞宗寺院、市関係者等、話題が大きく転回し、岩見沢市が四万三〇〇坪、苫小牧市が四万坪と土部分割附で昭和三九年に北海道進出を決しました。岩見沢市に教養部、短大、高校、苫小牧市に短大、高校の設置を進め、私が北海道出身ということもあつて、建設事務局長を兼務、随分飛び廻りました。三九年秋十一月に地鎮祭を行いました。日程の都合で総長、副総長等首脳部が出席できず、地元の市長、寺院関係者、同窓が主になり、私が地鎮祭の献入式を行いました。順調に発展し、地域社会に寄与して、学生、生徒もスポーツに大きな活躍をいたしております。私は今年八十四才、大きな持病もあり、ボケて参り、みなさまに迷惑をかけております。現在駒沢女子大等の役員をいたしております。元駒沢大学財務理事 初代事務局長 元駒沢大学 高等学校長

## 上磯町に帰り住んで

(上磯町水無)山下勇吉

事業の失敗から関東地方に出稼ぎに行き、関西、四国、九州各地で建築鉄骨の施工管理をして約二十年ぶりで上磯の水無に帰り住んで

町並みの姿と住む人々の姿に驚き戸惑いを感じ、まるで浦島太郎のようです。昔は何かにつけて町内、隣近所が助け合い共同で様々な行事等を行って来たが、今は「公より私」自分さえよければという思想、行動が最優先で「ゴミ拾い」等のボランティアを呼び掛けても参加者も少なく淋しい限りである。ゴミ袋を持って拾い集めている側を何人も犬の散歩やゴルフだ、パークゴルフだと平然と素通りして行く人々を見るにつけ、上磯の将来に不安を覚える。どうしてこうまで変わったのだろうか。自分さえよければ他人や地域社会はどうでも構わないのだろうか。これから益々進む少子高齢化の時代こそ心を一つにした助け合い、共同行動、コミュニティションが必要だと思ふは私一人の思い込みなのだろうか。毎日通る道の両側が雑草の伸び放題で、交通安全上や害虫等衛生上良くない放置されたゴミ、空き缶を見ても「金にならない」事には自分の汗を流したくない人々が増えた理由の一つは、その任にあるべき人や議員や町内会長等々の率先垂範遂行の実行力、リーダーシップの欠如から来るものと思ふ。

また、上磯町で数少ない名所と云われている「釜の仙遊」も荒れ放題で盆前に観光協会長と議員の一人に、草刈りをしよう申し入れたが、その後に行つて見ると入口から見ると草刈りされた。放置という他町村では考えられない仕事ぶり。町有林の間伐も業者任せで検査をしないから、何でこんなのを残したのと思うような仕事をした跡である。

各方面から聞かされて来る不協和音も田舎特有の見えないふりして陰で「ゴ、ゴ、ゴ」云々変な町に成ってしまった事は残念である。もし、巷間伝聞されているような一部の人の利益のために公正公平でないとしたらそれを糾明し、公平公正な社会にすれば良い。

「悪」の栄えた例は無く、あの、「鈴木宗男」でも逮捕起訴されるのである。報復を恐れ、見て見ないふりをする事が、更に「悪」を重ねさせる事になると思ふ。町民が心を聞き、一致協力し二十数年前の明るい豊かな上磯町に戻つて貰いたいものと念願するものであります。

また、上磯町で数少ない名所と云われている「釜の仙遊」も荒れ放題で盆前に観光協会長と議員の一人に、草刈りをしよう申し入れたが、その後に行つて見ると入口から見ると草刈りされた。放置という他町村では考えられない仕事ぶり。町有林の間伐も業者任せで検査をしないから、何でこんなのを残したのと思うような仕事をした跡である。

クジラと同じく直接自分達の生活に無関係(被害に合う等)の連中の無責任な発言に依つて、多くの人命が失われ家畜や農作物が被害にあつた事実や苦しみは誰がどうやって償うのか、「暮マ」の狩猟禁止を軽々に決め被害を拡大させた行政やその関係団体の責任を問うものである。又、人家近くの杉の密林を放置し「クマ」に隠れ家を提供している地主も共同正犯である。早急に「杉」の密林を見通しの良い手入れの行き届いた本当の意味で育成林にして欲しい。木が多いから緑豊かだと勘違いせず、間伐し枝払いしてこそ本当の大本に成る事を知つて欲しい。密植でヒヨロ、ヒヨロした木は風雪に耐えられず、どんどん折れ枯れていくだけである。間伐して見通しが良くなれば「クマ」は人家人里には出て来なくなる。

更に広葉樹を植える餌になる木の実を「ドングリ、ブナ、クリ、コクウ、山ぶどう、クルミ、トチ等」熊に返してやるべきである。杉を伐採し広葉樹の植林こそ治山治水の効果もあり、漁業資源の確保にも成るのである。

上磯町が他町村に先駆けて「杉」の密林を整理し、熊の被害から住民を守る事を積極的に進めて欲しいと念願して止まない。

上磯の熊が  
人里に入る訳

広葉樹を伐採して針葉樹を植えたために熊の木の実は好物の植物が特に「杉」の森林では皆無の状態です。下草も生えない。又、「杉」が電柱

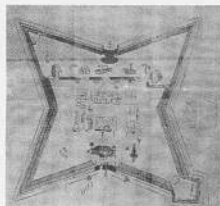
六月の海岸クリーン作戦の時、役

# Town

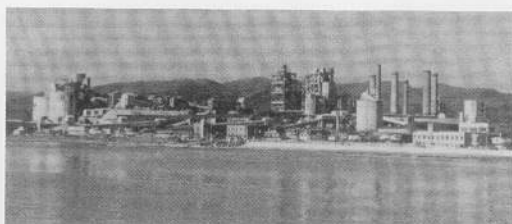
上磯町を  
もっと和らろ!!

## 歴史…上磯のあゆみ

- 建保4年(1216) この頃安東氏、東北地方の大部分を支配するようになる。
- 嘉吉3年(1443) 下国安東太郎盛季、南部義政に破れ、海路矢不來に上陸し、茂別館を築く。このころから、蠣崎氏など津輕の豪族がのがれて渡來した。
- 長祿元年(1457) エソの酋長コシャマイン、和人の諸館を攻め落とす。武田信広これと戦い、七重浜付近で倒したと伝えられる。
- 天正18年(1590) 蠣崎慶広、豊臣秀吉から安東氏に代わり蝦夷の支配権を受ける。蠣崎氏は後に松前氏に改姓。
- 文化4年(1807) 幕府が蝦夷地を直轄地とするが、16年後松前藩へ返還する。
- 安政元年(1854) 日米和親条約締結。箱館、下田が開港し、幕府直属の箱館奉行が置かれる。
- 安政2年(1855) 松前藩が戸切地陣屋を築く。



- 明治元年(1868) 10月20日、幕府脱走軍森町鷲の木に上陸、箱館戦争が始まる。松前藩兵が自ら戸切地陣屋を焼き払い、五稜郭に退去する。
- 明治2年(1869) 箱館戦争終結。開拓使が置かれ、函館支庁所管となる。蝦夷を北海道と改め、11国86郡を設定。上磯官修墳墓が創立される。
- 明治12年(1879) 有川、戸切地村が合併し上磯村に。茂別村でサケの増養殖事業始まる。
- 明治13年(1880) 上磯村を元村とし、他4か村の戸長役場を置く。茂別村にも戸長役場が置かれる。
- 明治17年(1884) 種田金十郎が、トックリ窯によるセメント製造を始める。有川正教会(現上磯ハリストス正教会)の会堂が建立される。
- 明治18年(1885) 葛登支岬灯台創設される。
- 明治23年(1890) 北海道セメントK.K.(現太平洋セメント(株)上磯工場)が石灰石を採掘し工場を建設。



- 明治29年(1896) トラピスト修道院創設。



- 明治33年(1900) 上磯村一級町村に。
- 明治39年(1906) 茂別村二級町村に。
- 明治42年(1909) 上磯村に初めての電灯が本町(現在の中央2丁目)に灯る。
- 大正元年(1912) 川田龍吉男爵が当別に「川田農業試験場」を開設。酪農、畑作、林業の技術改良を研究する。
- 大正2年(1913) 五稜郭・上磯間に鉄道開通。久根別停車場設置。
- 大正7年(1918) 町制施行、上磯村が上磯町となる。
- 昭和3年(1928) 川田龍吉男爵が実験栽培に成功した馬鈴薯が優良限定品種「男爵いも」と名付けられる。
- 昭和7年(1932) 上水道を布設。電話一般に開設。
- 昭和20年(1945) 茂別村が米軍機の空襲を受ける。民家が破壊され2人が死亡。
- 昭和22年(1947) 新憲法による初の町長・町議会議員選挙。
- 昭和29年(1954) 解散請求により、町議会解散。台風15号で青函連絡船「洞爺丸」など5船が海難。
- 昭和30年(1955) 上磯町と茂別村が合併。現在のの上磯町に。
- 昭和42年(1967) 知的障害者福祉施設「おしま学園」が当別に開園。
- 昭和53年(1978) 総合体育館完成。
- 昭和56年(1981) 自治制施行100周年記念式典を挙げる。
- 昭和58年(1983) 現役場庁舎完成。
- 昭和60年(1985) テクノポリス函館、上磯工業団地完成、分譲開始。
- 平成2年(1990) 公共下水道、七重浜地区で一部供用開始。
- 平成3年(1991) 上磯ダム供用開始。



- 平成5年(1993) 7月12日夜北海道南西沖地震(M7.8)発生、上磯町は震度4を記録。
- 平成7年(1995) 現上磯消防署庁舎完成。
- 平成9年(1997) 上磯町総合文化センター「かなでーる」完成。
- 平成13年(2001) 上磯町温水プール「かみんく」完成。

# 上磯町の素顔

# Kamiiso

古い歴史と豊かな自然に恵まれた上磯町には、現在3万7千人の人々が住んでいます。まず最初に、この町の姿と、これまでの歩みを見てみることにしましょう。

**■ 地勢・人口** 上磯町は北海道の南部、渡島半島に位置しています。

東南部は道南の中心都市函館市、西部は木古内町、北部は大野・七飯町と厚沢部町に接し、また、南部には函館湾が広がっています。

市街地は函館湾沿いに帯状に形成されており、背後は総面積の約8割を占めている山林に囲まれています。

人口は37,013人（平成13年2月末日・住民基本台帳）。年々増加傾向に有り、東部に位置する七重浜・追分地域では、人口の集中化が進んでいます。



- 面積 / 262.41 km<sup>2</sup>
- 位置 / 北緯 41°43'02" ~ 41°52'07"  
東経 140°43'00" ~ 140°26'02"
- 広さ / 東西 24.4 km  
南北 24.1 km
- 人口 / 37,013人  
(男) 17,858人  
(女) 19,155人
- 世帯数 / 14,132世帯

● 地目別面積 (ha)	
田	811
畑	980
宅地	627
山林	7,946
牧場	34
原野	490
池沼	15
雑種地	359
その他	14,979

【資料/人口は平成13年2月末日現在の住民基本台帳人口  
地目別面積は平成12年1月1日現在の固定資産税課税調査から】

**■ 気候** 道南にあるため、春と秋は温暖な日が多く、冬は季節風が強いものの積雪量が少なく、住みやすい町です。年間平均気温は9.2度、年間降水量は936.5mm（平成12年・上磯消防署調）で、農産物の栽培に適しています。

**■ 町名** 「上磯」という名称は、明治2年に蝦夷地が北海道に改められ、11国86郡が置かれたときに、渡島国の中の「上磯郡」として初めて称されました。北海道では、古くから東を下、西を上とする習慣があり、函館を中心に東を下海岸と称し、西を上海岸、つまり上磯と称されるようになったと伝えられていますが、定かではありません。

町村名として称されるようになったのは明治12年で、当時の有川村と戸切地村との合併の際に、両村の「村名付与願」により函館県令 時任為基が命名したとあります。



**■ 沿革** 嘉永7年（1854年）、日米和親条約の締結により箱館港が開港。上磯地区はその後、箱館戦争の舞台ともなり、急速な近代化の波が押し寄せることとなります。

明治11年に郡区町村編成法が制定され、これにより明治12年に上磯郡の中の有川村と戸切地村が合併して上磯村となり、明治13年には「上磯村他四ヶ村戸長役場」が設置されました。すなわち、ひとつの戸長役場で複数の村を管轄していたわけです。

明治30年には「北海道区制、1級、2級町村制」が制定され、上磯村は明治33年に1級町村に、茂別村は明治39年に2級町村となり、自治制が施行されることとなります。

大正7年には町政が施行され、上磯村は上磯町になり、昭和30年には茂別村と合併し現在に至ることとなります。

当時の上磯村役場





### 国指定文化財

～松前藩戸切地陣屋跡～（史跡）

所在地 上磯町字野崎66-10、100-9、182、183-10

安政元年(1854)日米和親条約(神奈川条約)締結による箱館港の開港にともない、幕府は外国船渡来による予測できない事態に備えて蝦夷地の防衛を強化する一環として松前藩に本陣屋を構築させ守備に当たらせた。

本陣屋は函館湾の西北にあり、市街地から約5km内陸に入った標高約70mの見晴しの良い台地に位置する。

安政2年(1855)6月に着工、10月に完成。



整備状況



発掘調査風景

## 上磯町の文化財

道南は北海道の中でも古い歴史をもつ地域で、上磯町にも多くの文化財が存在しています。

町では、松前藩戸切地陣屋跡の復元・周辺環境整備を進めるとともに、これら文化財の保護・伝承に努めています。

～茂別館跡～（史跡）

所在地 上磯町字矢不來129番地ほか

嘉吉3年(1443)

津軽の管領安東太郎盛季が南部義政に十三湊を攻略され、さらに小泊も奪われ、蝦夷島に渡った時、館を造ったのに始まり、のち安東政季、茂別(下国)家政が守備した。

大館、小館とも北、東、南の三方に土塁をめぐるしており、各館内にも、仕切状土塁が認められ、土塁もよく保存されており、貴重な史跡である。



### 有形文化財

～円空作仏像～

所在地 「富川八幡宮」「上磯八幡宮」「茂辺地曹溪寺」内

僧円空は寛永9年(1632)美濃国(岐阜県)に生まれ、23才で出家し僧となって北は北海道から南は京都、奈良に至る全国各地を修行している。

北海道には寛文6年(1666)春、35才の時に渡ったとみられる。

「富川八幡宮」の円空仏の背面には墨書きで、梵字が書かれており「みそぎ」の神事の言い伝えを残している。

「上磯八幡宮」の円空仏は極めて保存良好で、細いスジ彫の冴えたノミ痕を残し初期の作風をよく知ることができる。

「茂辺地曹溪寺」の円空仏は、昭和10年に道庁の史跡調査員・杉山寿栄男氏により発見されたもので、本道の円空仏調査の発端となったものである。



上磯八幡宮の円空作仏像



富川八幡宮の円空作仏像

～御神輿～（有形民俗文化財）

所在地 上磯町中央1丁目3番3号（有川大神宮内）

有川大神宮の氏子総代達が協議の上、嘉永6年(1853)3月春、種田徳兵衛氏初め6名の総代が北前航路の弁財船に乗り込み、日本海廻りで敦賀に上陸した。

大阪に到着して御神輿の購入にあたったが、完成されたものがなく、たまたま心齋橋通り本町鎌田氏宅店舗にあった京都、伏見稲荷の発注品であったものを懇請して購入した。

本道では珍しい六角型造りである。

有川大神宮



御神輿 ▶



### 【真空鮭フィーレ】

ふるさとの味 獲れたて鮭を真空パックしました。

半身(1枚入)1袋300円  
((税別))



その他に、お歳暮用 活ホタテ

■ ゆうパックも茂辺地・当別郵便局で受付け致します。

上磯はまなす漁協  
単品ガイド

### 美味しゅ!!

春の津軽海峡ならではの  
みずみずしい味わいを  
ご賞味下さい。

1袋 180g 200円  
((税別))

### 【海峡わかめ】



# ふるさと応援団

## 「東京上磯会」

ふるさと上磯を応援しようと「東京上磯会」が発足したのは、平成7年(1995)。

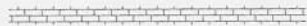
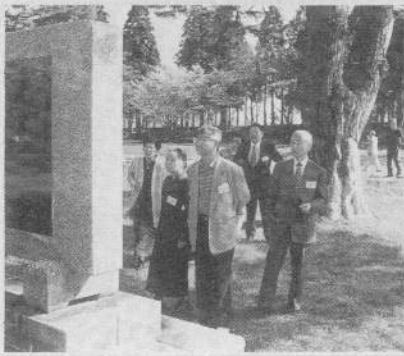
現在では300名をこえる会員が親睦を深め、ふるさと応援団として首都圏で活動をつづけています。

年1回の総会には、近県からも多数の会員が集い、盛大なパーティを開いております。

また、平成11年(1999)には、初めての「ふるさと訪問旅行」も行われ、地元との交流を深めました。

### ふるさと訪問旅行の「東京上磯会」

(松前藩 戸切地陣屋跡を訪れる会員たち)



### ～総会・懇親会に於いて～



● 昭和10年当時の思い出の写真 ●

## 無形民俗文化財

### ～上磯奴～

所在地 上磯町中央1丁目3番10号(上磯町教育委員会内)

寛永12年(1635)江戸幕府の武家諸法度により、諸国大名の参勤交代の大名行列が始まった。

「上磯奴」の原形は、この大名行列であり町内神社の大祭で神輿の門払いの先駆として欠かせない。

その服装は、揃いの半纏(はんてん)、手っ甲、脚絆(きゃはん)、腰巾着に化粧前掛けをし、草鞋履き、腰に奴刀を差す出立ちである。白扇を手にした師匠の指揮により総勢30余名が練り歩くため、その行列は約100メートルにも及び。

その豪放で繊細な技と豪華絢爛荘重な風格は、誠に神事にふさわしく貴重な文化財である。



### ～有川天満ばやし～

所在地 上磯町中央1丁目3番3号(有川大神宮内)

この囃子は、上磯の鎮守有川大神宮の祭り行列に組み入れられる祭り囃子である。



「天満ばやし」の伝承については確かな資料はないが、嘉永6年(1853)購入の六角型神輿と一緒に大阪の天満ばやしが伝授されてきたものと思われる。

この囃子の楽器の構成は、大太鼓、小太鼓、笛、鉦、三味線からなり、引き綱で引いて進行する人形山車に乗り込んで、演奏する。

「大阪天満囃子の」原形ともいえるもので、歴史的に浅い北海道において、最も古い囃子である。

### ～矢不來天満宮の奴～

所在地 上磯町中央1丁目3番10号(上磯町教育委員会内)

上磯の文化財のひとつに伝統の「上磯奴」がある。約150年前に町に伝わったといわれ、独特の足さばきの豪華な奴道中が見るものを楽しませる。町内にはいくつかの「奴」のバリエーションがあり、なかでも矢不來天満宮の例大祭に披露される「奴」は赤い襦袢とユーモラスなかけ声で独特の面白さがある。



## 「古いのれんに新しいセンスを込めて」



我が町上磯町に育まれて70年。昭和7年、初代が日本セメント(株)上磯工場前に開業する。開業当初は、銘菓を中心に上生菓子販売。この時に「釜の仙峽」を発売し、現在も製造販売をしている。この時代、蕎麦は3銭、菓子類は1銭の時代。造れば次から次と売れる時代であった。

昭和60年、2代目があとを継ぎ、今までの菓子類の他、「セメンぶくろ最中」「陣屋桜」「五稜の月」など、次々と新作菓子を作り、平成6年まで順調でしたが、バブルがはじけて年々減少し、町内商店街にも陰りが出て、次々とシャッター通りに変貌し、過疎化が進み、商店街として維持が出来ない時代になった。

平成14年11月1日、70周年を契機とし、国道228号線沿い、上磯消防署前に移転し、昔の賑わいを期待する。洋菓子、カフェ、そして本店と菓子店を併設し、今まで以上、上磯町民に愛される店づくりに貢献したい。

主に、串だんご、酒まんじゅう、すえひろ餅、きんつば、大福などを全面に押し出し、古き良き時代にプレーバック。

コンセプトは「古いのれんに新しいセンスを込めて」。

末広軒 佐々木博史

## 広告

ゆるっじやいませ

上磯消防署前に移転致しました

# 合併の風 (渡島では)

## ひきずる過去

三十五年以上も前、当時、人口九千人の鏡川村は、基幹産業のイカやワシの因漁にあえぎ、危機的な財政に追い込まれていた。もはや村には両館市との合併しか残されていないかった。

合併をめくり、村は推進派と慎重派に二分された。推進派は「大きな市になって幸せになる」と呼びかけ、慎重派は「合併によって発展するの」「村議は市議には当選できず、地区は衰退する」と恐れた。

そして、合併後の地域振興を条件に住民は賛成に取れんされ、六年両館市と合併した。合併後、鏡川では水道や道路整備が進んだ。村職員も市幹部の道をたどり、市議会にも有力者を送り込めた。

合併は正しかったとの思いが地区では圧倒的という。それから七年、両館市は七三年にも亀田市と合併。今日に至る。亀田が合併した最大の理由は、衛星都市で急成長を遂げるマチに、上下水道、道路、住宅など都市の基盤整備が追いつかなかったことだった。

## 「長兄」不信

一年後の新駅舎の完成を目指し、工事が進むJR函館駅。かつての完成予想図には、必ず新幹線が描かれていた。しかし、国の方針で新幹線の新駅舎が大野町内に固まった今も、函館市は新幹線の函館駅乗り入れの悲願を捨てていない。そんな同市に上磯や大野など周辺町は冷ややかな視線を送る。

「新幹線はかりではない。函館と近郊町と一緒に国へ施設誘致などを陳情しても、結局、得をするのは函館市だけ。近郊町には積年の苦しい思いがある。これまで函館市は地域の『長兄』としての役割を果たして来なかったから、

飯に函館と上磯、大野、七飯、戸井の一市四町が合併した場合、旭川市をしのぐ道内二番目の都市となる。それは函館市のもう一つの悲願だった。『中核都市』への昇格を意味し、国や道から委譲された様々な権限を手中にする。更に国が期限とした三年後の三月までの合併には、合併前の地方交付税額が十年間保証される一方、街づくりのために道路や施設などの建設に認められる合併特別債の特典もつくという。

周辺町の幹部は「国の支援措置も、結局は函館自身の整備に使われてしまふ可能性がある」と不信を隠さない。

## 効果と弊害

「合併によって地域全体の開発がより一体的に進む。人口の大小にかかわらず、対等の意識で協議を進めたい」と語る函館市の井上博司市長。

昨年六月、上磯、七飯、大野三町長の座談会が行われた。だが、上磯町の海老澤順三町長は「合併には反対。町が大きくなればいいというものではない」と、明快な調子で言い切った。

あれから一年。海老澤町長は「合併しないでやっていたらベストだが、財政的打撃を被るかも知れない。判断材料が少なく、どう見極めたらいいか」と、上磯町では、合併問題研究会が四月、約十ヶ月の検討を報告書にまとめた。しかし、「まとめ」にな

ると急にトーンダウン。合併のメリット(効果)、デメリット(弊害)の記述は一般論に終始。「本当は上磯町固有のメリット、デメリットを一つ一つ検証して記述するつもりだった」と研究会メンバーは述懐する。しかし、議論を進めるうちに何がメリットで、何がデメリットか、報告書は予定から一ヶ月遅れた。

「合併によって地域全体の開発がより一体的に進む。人口の大小にかかわらず、対等の意識で協議を進めたい」と語る函館市の井上博司市長。

## 兵糧攻め

津軽海峡に初夏の日差しが降り注ぐ戸井町。今季のコンブ漁が再開され、浜に活気が戻った。同町の財政面は、漁業がもたらす税収よりはるかに巨額の歳入項目がある。国が各自治体に配分する地方交付税は、

津軽海峡に初夏の日差しが降り注ぐ戸井町。今季のコンブ漁が再開され、浜に活気が戻った。同町の財政面は、漁業がもたらす税収よりはるかに巨額の歳入項目がある。国が各自治体に配分する地方交付税は、

津軽海峡に初夏の日差しが降り注ぐ戸井町。今季のコンブ漁が再開され、浜に活気が戻った。同町の財政面は、漁業がもたらす税収よりはるかに巨額の歳入項目がある。国が各自治体に配分する地方交付税は、

津軽海峡に初夏の日差しが降り注ぐ戸井町。今季のコンブ漁が再開され、浜に活気が戻った。同町の財政面は、漁業がもたらす税収よりはるかに巨額の歳入項目がある。国が各自治体に配分する地方交付税は、

## 国への反旗

「市町村合併の推進に当たっては、山村地域の事情に十分配慮するとともに、いかなる形であれ合併を強制しないこと。国の合併政策にクギを刺す決議が承認された。これは全国約千五百の山村町村でつくる『全国山村振興連盟』の通常総会でのことである。

道が二〇〇九年九月に示した合併推進要綱で知内町は木古内との合併パターンが示された。両町の関係は決して悪くない。しかし、両町長とも短兵急な国の

合併推進を批判し、合併を否定する。「町づくりは五十年、百年の事業。地域の事情もある。財政難が理由の全国一律の合併など、まさに国の無策でしかない」と知内町長はいう。

合併推進を批判し、合併を否定する。「町づくりは五十年、百年の事業。地域の事情もある。財政難が理由の全国一律の合併など、まさに国の無策でしかない」と知内町長はいう。

合併推進を批判し、合併を否定する。「町づくりは五十年、百年の事業。地域の事情もある。財政難が理由の全国一律の合併など、まさに国の無策でしかない」と知内町長はいう。

## 火付け役

森町青年会議所は今年、「合併」について勉強会を重ねて来た。そこで浮上したのが、「町幹部、住民代表、大学教授らをパネリストに招き、大型スクリーンに人口動態や財政状況などのデータを映し、発言者の顔もクロースアップ。来場の町民には、手押しボタンを配って賛否を電光掲示板に表示する。テレビ生中継しながらの演出で四時間半の長丁場でも最後まで飽きさせない参加型にする」という案も飛び出した。

一部から「青年会議所は合併推進なのか」といわれることもある。損な役回りは承知で、合併議論の火付け役をかって出る。

一部から「青年会議所は合併推進なのか」といわれることもある。損な役回りは承知で、合併議論の火付け役をかって出る。

一部から「青年会議所は合併推進なのか」といわれることもある。損な役回りは承知で、合併議論の火付け役をかって出る。

## 「内浦市」の思惑

「市」を目指す合併でなければ意味がない。八雲町長谷川町長長万部から砂原までの道路延長約百キロ、噴火湾をほぼ半周する広いエリア。長万部、八雲、砂原の四町に松山管内今金町を加えた「Fパターン」。

「市」を目指す合併でなければ意味がない。八雲町長谷川町長長万部から砂原までの道路延長約百キロ、噴火湾をほぼ半周する広いエリア。長万部、八雲、砂原の四町に松山管内今金町を加えた「Fパターン」。

「市」を目指す合併でなければ意味がない。八雲町長谷川町長長万部から砂原までの道路延長約百キロ、噴火湾をほぼ半周する広いエリア。長万部、八雲、砂原の四町に松山管内今金町を加えた「Fパターン」。

「市」を目指す合併でなければ意味がない。八雲町長谷川町長長万部から砂原までの道路延長約百キロ、噴火湾をほぼ半周する広いエリア。長万部、八雲、砂原の四町に松山管内今金町を加えた「Fパターン」。

「市」を目指す合併でなければ意味がない。八雲町長谷川町長長万部から砂原までの道路延長約百キロ、噴火湾をほぼ半周する広いエリア。長万部、八雲、砂原の四町に松山管内今金町を加えた「Fパターン」。

# 「賛成」「反対」ほぼ拮抗

賛成派「分権時代に不可欠」  
反対派「行政サービス低下」  
道南全首長の回答内容

首長名	合併は必要か	判断の理由
国館・井上博司市長	必要	地方分権が進み、自治体には高度な行政能力が必要で、人的、財政的な基盤が不可欠
上磯・海老澤順三町長	合併の判断は慎重な対応が必要	交付税見直しや国から地方への財源委譲など不透明な部分が多く、すぐに答えをだせない
七飯・水嶋清町長	必要	国債発行も難しく、地方自立のため、適度な町村規模に組み替えが必要
大野・吉田幸二町長	場合によって必要	財源不足のため
戸井・吉沢慶昭町長	基本的に合併せず、単独で生き残りを図る	きめ細かな行政サービスがなくなる心配があるから
恵山・工藤 篤町長	否定はしない	町政を立ち直らせなければ、合併議論をスタートできない
榎法華・船木英秀村長	今後の状況が見えず、判断しがわる	住民の判断が重要で、行政サービス低下など「やむなし」との住民の判断なら合併せず
南茅部・飯田 満町長	必要	地方分権時代に対応できる体制整備のため
恵那・松本豊勝町長	必要と思わない	小規模自治体は、小回りが利き、防災面を含めた住民サービスが可能
砂原・長谷保和町長	必要	少子高齢化、行政事務の広域処理などの面で、合併は必然的に必要になる
森・湊 美善夫町長	必要とは思わない	現段階では、合併によって町の将来がよくなるとは判断できない
八雲・長谷川洋二町長	積極的に検討すべき	国の地方交付税制度などを考えると、財源の乏しい自治体にとって状況はますます厳しい
長万部・加藤大明町長	必要ではない	行政区域が広くなりすぎ、きめ細かな行政サービスができなくなる
木古内・大森伊佐緒町長	自治体により必要性は異なる	財政の効率化だけを目標とする合併には感心しない。将来のまちづくりの観点が必要
知内・橋本哲也町長	各自自治体で異なり、押し付けることではない	自治体それぞれに歴史、文化がある。国による合併の強制は納得できるものではない
福島・野内 裕町長	急いで行う必要はない	人口や財政規模だけの合併では効果が期待できない
松前・松村明夫町長	必ずしも必要とは思っていない	地理的な条件などにより、合併に向く地域とそうでない地域がある

**描けぬ将来**  
恵山に隣接する榎法華村。この両村は高齢化と過疎の進行は渡島管内でもトップクラスである。「財政の苦しさを共に通す」「財政再建を急ぎたい」年間予算を千円とすれば自らの収入は九十円しかない。榎法華村の船木村長も「村財政はあと数年しか持たない」と危機感を募らせる。

北海道新聞  
連載「合併の風」より転載